

特204

675



(著者の代時職住)

基督曰く

「汝等は白く塗りたる墓に似たり外は美
はしく見ゆれども内は骸骨と諸の汚穢に
て充つ汝等もまた外は人に義しく見ゆれ
ども内は偽善と不法にて充つ……汝等い
かて地獄の刑罰を免れんや」

(馬太傳廿三章二十七節以下)

行發舍教文

今井兼著
余が改宗の動機



始



特204
675

人もしキリストに在らば

新たに造られたる者なり

古きは既に過ぎ去り

視よ新しくなりたり

(哥林多後書五章十七節)



緒言



むかしから改宗は困難な事である、かりに眞宗から法華宗に改宗するとせんか、寺院の迫害、信徒の反對、それは容易ならぬ問題である、まして佛教から基督教に改宗するとせば、其至難推して知るべしである、さりながら何事も一大改革をなさんとすれば、そこに苦難の到來するは無論のことである、然るに迫害の故に、以て改革を仲止するは卑怯未練である、「義しき事の爲に責らるゝ者は福なり天國は即ち其人のものなれば也」と、基督は仰せられた。

私の二十三年間の佛者生活と、二十六年間の基督者生活との間に學び得たる智的考證、比較優劣の大問題は此著書の目的では



ない、たゞ如何なる動機から改心改宗したかを告白したのである、それは「改宗は相成らぬ」との因襲的思想に囚はれて、躊躇する求道者諸君の爲に、もし参考ともなりなば、著者の満足とするところである。

昭和二年二月

東京市小石川区水道端町の寓居にて

著者誌

目次

第一章 基督教に接する前

- ▲病中の不安不平……………一頁
- ▲易經の本領さは……………二
- ▲火風鼎と澤火革……………四
- ▲新年の病的心理……………五
- ▲佛者の破戒生活……………七
- ▲東洋のむかし噺……………八

第二章 基督教に接した時

- ▲路傍説教を聞く……………一〇
- ▲湯屋で説教聴聞……………一一
- ▲處女の接待振り……………一三

▲會堂の説教聽聞	一五
▲大舉傳道の傍聽	一六

第三章 新約聖書に接して

▲新約聖書の返却	二一
▲哀む者は福なり	二二
▲聖書研究の志願	二三
▲ヤソ退治の辯士	二五
▲舊き革蠶に新酒	二七
▲舊き革蠶の持主	二八
▲青年信者の訪問	三〇
▲再び聖書の研究	三一

第四章 聖書研究の結果は

▲基督の事につき	三三
----------	----

▲父なる神につき	三四
▲自身の事につき	三六
▲悔改めの源動力	三七
▲毎夜詩篇を読む	三九

第五章 余が舊生涯の概記

▲泉州堺市の出生	四一
▲河内の修學時代	四二
▲高野山修學時代	四三
▲京都の修學時代	四四
▲奈良の修學時代	四五
▲河内の住職時代	四六
▲東京の苦學時代	四七
▲銚子町住職時代	四八
▲北海道住職時代	四九

▲債鬼門に迫まる……………	五〇
▲小樽に新寺建立……………	五一
▲内地に轉地療養……………	五二

第六章 余が新生涯の發途

▲浸禮式に與かる……………	五四
▲先祖の罰あたり……………	五五
▲改宗の史的事實……………	五六
▲眞如親王を見よ……………	五七
▲外來文明の包容……………	五八
▲家から放り出せ……………	五九

第七章 今後の使命に就て

▲日々早天の祈禱……………	六二
▲テ博士と初對面……………	六三

第八章 未熟者の實地傳道

▲早天祈禱の應驗……………	六五
▲傳道の爲に献身……………	六七
▲瀬戸内海へ初陣……………	六八
▲福音丸より凱旋……………	六九
▲實妹と母の入信……………	七一
▲革と改名の理由……………	七三

第九章 余が改宗後の概記

▲廿數年間の祈禱……………	七五
▲海外傳道の使命……………	七六
▲布哇から米國へ……………	七七
▲エール大學にて……………	七九
▲ヒ氏遺族の健在……………	八二

▲ヒ氏の遺族慰問……………八四
▲ヒ氏夫人に會見……………八五

第十章 改心改宗の基因

▲聖書の絶對權威……………九〇
▲義人の篤き祈禱……………九一
▲基督の聖愛の力……………九二
附記……………九三

余が改宗の動機

今井 革

第一章 基督教に接する前

▲病中の不安不平

今より二十七年の昔、北海道札幌の一寺住職たりし時、病氣に冒されしため氣候の暖かなる内地に轉地休養すべしと、醫師の注告をうけた私は、千葉縣銚子町の自坊に歸り、慈母を保護して神戸市の實姉の許に立寄り、慈母の孝養を實姉に托して、自分は京都の本山に登り、病氣の故に轉任の請願旁々休養いたして居つた、頃は明治三十三年の十一月であつたが、病軀の爲めには寒い京都よりも、暖かい神戸の方がよからうと、實姉妹の親切

なる勤めにより、再び神戸に戻つて二之宮の實妹の宅で静かに療養いたして居つた。

そのころの私の心は、暮ゆく冬の寒空のやうに、餘裕のない寂しい冷やかなものであつた、寧ろ不平と憤懣に充されてゐた、益なき過去の事のみを回想しては、する事なすこと逆に逆にとばかり運ばれし身の、現在は恰かも、二階に上られて、下から梯子をとられて火を放けられた様な苦境にあるので、寝ても眠むれず「なに故にかくなりし身とをりをりは形に耻よ墨染の袖」と歌ひし故人のやうに、身は錦欄緞子の法衣を纏ひながら、心は悪鬼羅刹の如き瞋恚、憎悪、淺間しくも天を怨み人を恨んで、弱者の群に陥らんとするのであつた、斯は畢竟我が身の不徳、不信、不學のいたすところと、自らを戒めて懺悔滅罪を禱りつゝ、病中閑日月を送つてゐたが、何としても前途に希望の光りがない、人生に希望のないほど辛いことはない。

▲易經の本領とは

其とき私は釋迦の遺教經を讀んでゐたが、希望の興らぬのみか、反つて重荷いや増す苦痛に堪へかねて、何をがなと思ふ折から、不圖、東京出立の際、私の青年時代より深く私を愛してくれた某學者から贈られし、「高島易斷」のある事に氣がついた、夫をくられたとき、其學者は私に斯う言つた。

「易の本領は至誠天に通ずる道を教ゆるもので、宗教に近いものである、君が病氣療養の傍ら、若し之を研究するならば、確に君を益するであらう……」。

と、そこで私は荷物の中から、黄表紙の「高島易斷」十冊を取り出して、先づ其序文を讀んで見ると、斯ういふ意味のことが書いてある。

「易のことを八卦といひ、當るも八卦、當らぬも八卦といふが、易は當るに決つたものである、當らぬわけは、三圓、五圓、十圓と判斷料を取つて賣るからである、占ひは「賣らない」であるから、金錢を取つて賣るべきものではない、人が至誠を以て天に對する時は必ず通じて當るものである、金錢を取つて賣るために不純の思想が興つて、天意

が其人に通じないから、當らないのである……。」
とある、少年の時代に易經の素讀を習つた私は、こゝに面白い易の眞理を發見したので
研究を初めて先づ大體に通ずることができた。

▲火風鼎と澤火革

明日は、明治三十四年一月元旦であるが、明年は如何なる運命が自分に來るか占ひ見
んと思ひ、元旦の未明に指定の方法に従つて、齋戒沐浴して占つたところが。

「火風鼎」といふ卦が顯はれた、鼎は支那では、神への供物を煮る器である故に、此卦に
當つた人は、聽て神の供物となるべき人である。

と説明してある、自分は佛の供物であるのに、神の供物とは不審なので、更に變爻を占つ
た所が。

「澤火革」と現はれた、汚れて穢くなつた豹の斑紋が抜け落ちて、更に新しい鮮明な毛

と革るといふ卦であるから、この卦の人には改革が起り、革命が來り、革新する云々。
と説明してある、何うして革新するか、いつ革新するか、革新後は何うなるか夫は易經に
現はれてゐない、私は考へた、自分は十三歳の時から佛門に身を捧げて、即事而眞の眞言
密教に教養せらるゝこと二十有餘年、即身成佛の教理を頭腦には教へられたが、何等の體
験がない、日々愈々新たに新たならんとして、反つて俗よりも俗なるは何の故か、佛教我
を革新せしむること能はず、我眞言教に依て革新することを得ず、さらば我いづこに行き
て、革新の道を得て體驗せんか。

▲新年の病的心理

今日は明治三十四年一月元旦、新春の賀客は屠蘇機嫌でお目出度うございますと廻禮に
來る、されど失望失意の我には目出度もあり目出度もなし、餘儀なく改年の一里塚に辿り
ついたばかりである、靈的に死せる我に、何ぞ新年の喜悅あらんや、春は來しかど心は冬

である、人は歡べど我には憂ひである、欺かれし我には、人を見れば皆な盜賊に見え、軒並の門松は夜叉の行列に見える、腹立しく忌々しくて、心に法悦も安心立命もない、斯くまで荒み果てたる變態心理の我は、如何にせば新しき年と共に革新なし得るか、古の聖僧が住吉の社頭に立つて「來てみれば此所も火宅のうちなるに何故住吉と人はいふらん」と歌ひしとき、住吉大明神の返歌に「心がすめば此所も住吉」と答へし言を想ひ興した、なるほど心が澄めば此所も住吉である、たとひ埴生の小屋に住むとも住吉である、然し如何にせば我心、湛然と罪なくて澄み得るか、娑婆即寂光や煩惱即菩提の教義を頭腦に知つた丈では、とても我心すみ吉ではない、「本尊我心に入り、我心本尊の御心に入る」といふ入我我入の禪定三昧に入るにあらざれば不徹底である、さらば本尊とは夫れ何物ぞ、大日か、不動か、彌陀か、藥師か、觀音か、我は之等を本尊と仰いで修法すること二十有餘年、然して靈的革新を得ず、あゝ憐れなる宗教家なるかな。

▲佛者の破戒生活

護摩料を徴收して護摩供を修し、祈禱料をうけて祈禱をさしげ、布施なき經は讀まぬ」と、讀經にまで財施を貪ぼつて、宗教を賣物にする坊主商賣、眞面目に考ふれば佛者の生活ほど罪ふかきものはない、入るべからざる寺門に婦人を入れて、石碑の頭上に赤ん坊のお襦袢を乾すが如き醜態を、綾羅金繡の袈裟法衣に包んで、平然として妄言綺言の説教をする、佛者の矛盾、虚偽の生活、いかで其心に平和と満足があり得やうか、若しありといはゞ、其人は、豚を抱いて臭きを忘るゝの徒である、無しといはゞ其人は良心の呵責、佛天の忿怒をうけて居る證據である、日本にある十萬人の佛者中、自らを革新し、また人も革新せしめて、佛勅を勵行せるもの果して幾人ありや、自墮落なる佛者の生活斯の如くにして如何で世道人心を教化し得やうか、佛教信者にして佛教を知らず、眞言の信徒にして眞言宗を知るもの殆んど無きは怪むに足らぬ、あゝ恐ろしきは佛者の破戒無慙の生活で

ある。

▲東洋のむかし噺

私は病氣療養中、泌々と佛者生活の罪ふかきを痛感して、何卒して此自墮落の淵より、革新の岸に攀ぢ登らんと、焦慮ればあせるほど、苦悶けばもがくほど、自暴自棄の深海に陥らんとしつゝ、明治三十四年の一月は過ぎ、二月、三月、四月と味氣なき月日を送つてゐた、恰好トルストイの懺悔録にある。

「一人の旅人が草原で恐ろしい猛獸に襲はれた、己が身を救はんと水の涸れた井戸に飛び込んだ、井戸の底に一疋の龍が彼を呑んと大口を開けてゐるのを見た、野獸の爲に外には出られず、龍の爲に下には降り難く、辛ふじて井戸の隙間に生えてゐる野草の枝に取り縋つたが、段々つかれ疲れて、刻一刻恐ろしき死が兩方から迫つて来る、彼は猶ほ堪へてゐると、白と黒との二疋の鼠が現はれて、野草の葉を喰んでゐるので、もはや絶

體絶命、龍の口中に落ちて死なねばならぬと思ひ、つり下りながら、四圍を見廻せば野草の上に數滴の蜜の零れてゐるのを見て、彼は舌を出して舐めた。

といふ、東洋の昔噺にある其旅人のやうに、猛獸に食はれるか、龍の口に落ちるか、危機一髪の場合にあつた、私は其苦境に吊り下りながら、幸ひに一滴の甘い蜜を見出して夫を味ふた、其蜜とは何か。

第二章 基督教に接した時

▲路傍説教を聞く

甘き蜜とは何か、不思議なる導きにより基督の福音に接したことである、頃は明治三十四年の五月、もはや北海道の積雪も溶けたらんと思ふ時、幸ひ健康恢復の歡喜を得しかば再び北海道に雄飛せんと準備中の折から、一日夕飯をすまして、三之宮の邊りに運動に出かけての歸へるさ、三角帳場まで来りしとき、群集の聽客に對つて、雄辯をふるつて演説するものがある、何であらうかと停聽すると、夫は基督教會の青年諸君の路傍傳道隊であつた、今しがた一青年が基督を信じて救はれた身の證をするのであつた、其説の可否は別問題として、如何にも熱心に大膽に己が信ずる道を往來の人に傳へて居らるゝ、其殊勝なる活動振を見て、當時一ヶ寺の住職たりし私は深く感服したのである、彼等は牧師、

傳道師ではない、普通の信徒である、然るに佛教信者にして佛教哲學を學んだり、禪學をやつて得々たる者はあるが、己が所信を路傍に立つて傳道する佛教信者果して幾人ありやと彼等を想ひ自らを顧みるうちに、聽て路傍説教が終はると「皆さん只今から教會で説教會を開きますから、どうぞ御來聴ください」との勧めに従ひ、私は青年達の背後に跟いて會堂に入つて説教を聞いた、其要點は「……人間は罪の爲に安心も平和も無いといふ事と基督を信するによりて而已救はるゝといふ事……」の説教であつたが、なぜ基督を信すれば救はるゝかの問題には、やゝ詳細を缺いてゐた爲に、佛者たる私には遺憾ながら不徹底であつた。

▲湯屋で説教聴聞

翌朝、私は朝湯に往つて流所で洗つてゐると、側に洗つてゐる一人の青年が私に「貴下は昨晚、教會で説教を聞いてゐらした方じやありませんか、と云ふので、ハイ聞いてゐ

ましたと答へた、青年が云ふには「昨晩の説教よく御判りでしたか」と訊くから、よく判りましたと答へた「判りましたら、基督教を信仰なさいませんか」と云ふので、私は基督教を信仰しませんと答へた、スルト青年は「じゃア何か信仰してゐらツしやるものがありますか」と反問するから、僕は佛教を信じて居ると答へた「佛教は何を信じてゐらツしやいますか」と訊くので、僕は眞言戒律を學んでゐるとやつた、青年は吃驚した顔色をして「貴下、戒律では決して救はれません……」。

一寸お待ち下さいと云つて、小桶に湯を汲んで私の背後に廻つて来て、私の脊中を洗ひながら、基督教に云ふ神様は斯ふ云ふ神で、基督といふ方は斯う云ふ方であると、熱心に傳道するのである、私の脊中を親切に洗つてくれてゐる人と、まさか風呂場で議論する事もできず、とんでも無い者に出會つたものだと思ひながら、黙つて聞いてゐた、聽て厚意を謝して私は歸つて来た。

翌朝、湯に行つてみると其青年は先刻に来て洗つてゐて、「お早うございます」といふ

ソラ来るぞと思ふと「ア一寸洗ひませう」と、またもや私の脊中を流しながら傳道する、翌朝往つても其通り、其次の朝も其通り、そして青年のいふには「私は此湯屋の横町に住む、小田と申す彼の教會の信者でございます、宅には聖書も参考書もありますからどうぞ一度お遊びに入らしてください、貴下の御宅は何所でございますか」と訊いて、徐々に我城廓に肉迫するところ、仲々隅に置けない青年だと思つた。

▲處女の接待振り

それから二三日経て、ある夕方、私は二之宮の實妹の宅から兵庫の實姉の許にゆかんと例の三角帳場の側を通つて、下山手三丁目の四ツ角に來た所が、其處の電信柱の影に、赤色で十字架を描いた提燈をかざした、見知らぬ人が立つてゐて、「モシ〜」と私を呼んで「之を差上げますから此上の教會で、之から基督教の説教會が始まりますから、お聞きください」と云つて、一枚の印刷物をくれた、有難うと云つて、私は夫を読みながら、

西へ西へと歩きながら、唯ある外燈の光りで能く見ると、夫は説教會の廣告文である、其文の一節に、基督の曰く、「凡て勞れたる者、また重きを負る者は我に來れ、我なんぢらに息ません」(馬太傳十一章二十八節)とある、私は繰返へし繰返へし讀んで考へた、自分は重荷を負ふて勞れてゐる者であるが、基督は如何にして我を息ませ給ふか、兎に角説教を聞いてみたいとの希望から、もと來し道へと引き返へして、會堂の門前まで來ると、其處には十數名の青年男女が立並んで讚美歌を歌ふてゐた、私は導かれて堂内に入つたが、開會時間に未だ早くて誰もゐない、どの椅子に座してよいかと躊躇とき、講壇側の扉の影から處女が現はれて來て、「此所がお涼しくて良布うございますから、何卒」と、私を窓の近くへ導いてくれた、そして處女は「貴下のお履物は何處にお置きになりましたか」と訊れて、私は玄關に脱ぎ放しにして來ましたといふ、「夫では間違うと不可せんから」と云つて、私の古下駄を持つて來て、私の椅子の下に入れてくれた、そして「モウ直に始まりますから」と云ひつゝ聖書と讚美歌を貸してくれて、「お暑うございますから」と團扇を渡

してくれた、私は其團扇を使いながら、行届いたる接待ぶりに感心して開會を待つてゐた

▲會堂の説教聴聞

聽て初夏の夕の七時半、司會者は開會を宣して、嚶唳たる音楽と共に一同起立して、讚美歌を歌ひ、聖書を読み、祈禱を捧げて、再び讚美歌の後、司會者の開會の辭が終ると、牧師は講壇に現はれ、「神の顯現」と題して説教せられた、論理整然たるお教話が終つて祈禱を捧げられ、一同讚美歌を歌ふて閉會を告げた、私は起つて歸らうとする時、牧師は私に「貴下は初めて入らっしゃいましたか」と云ふ、ハイ初めて、と挨拶すると、「宗教は大切でありますから、どうぞ今後も入らして下さい」と勧められた、其とき教會の役員が、「若しお差支の爲に御來會できぬ場合は、當方から御伺ひしても良布うございますから、住所と姓名を此カードにお記し下さい」と、深切に鉛筆を添へて渡された、私は北海道から旅行中の者でありまして、近いうちに歸る筈ですが、若し尙ほ滞在する場合には伺ひま

すから宜しく、と申し述べて歸る途中、我々佛教會の冷淡なるに比べて、基督教會の用意周到なる接待ぶりには、ほとく感服した、三角帳場の教會では路傍説教をする、湯屋では自分の背中を洗ひながら傳道する、此教會では斯くも鄭重に歡待する、そして聽客を訪問してまで傳道しやうと云ふ、元來基督者の此熱誠は何れより來るものか、其根源は何かを考へつゝ歸つて來た、其教會は神戸バプテスト教會で、牧師は吉川龜先生であつた。

▲大舉傳道の傍聴

其後一週間を経て一朝、神戸新聞を讀んでゐると「今晚、神港俱樂部に於て基督教の大舉傳道がある」との廣告を見たので傍聴に出かけたが、講師は大坂基督教會の牧師宮川經輝先生で、「祈禱の精神」と題して、雄辯をもて力説せられた、眞言宗の教養を積みし私は、基督教の「祈禱の精神」を承つて、頗る有益に感じたので、翌晩も傍聴に参りましたが、講師は故デフオレスト博士であつた、博士は宣教師の身を以て、日本帝國の爲に

多大なる貢獻をなされた功勞により、後には明治天皇より勳三等旭日章を賜はりし程の愛日家であつた、當夜は「基督の犠牲心」と題して、巧みなる然かも莊重なる日本語を以て、五六百の聽衆に最も深き感動を與へられた、其講演の一節に。

「私は明治七年に日本に参りまして、色々日本の英雄の歴史を研究いたした内に於て、最も感心したのは佐倉惣吾でありました、彼は佐倉の農民の爲に磔刑に處せられて犠牲と成て死んだ人である事が解つた時に、日本人は實に尊い犠牲心を有つて居る國民であると感じて、更に吉田松陰の傳を讀んでみた所が、我は國難に當つて死ぬると誓つて居らるゝ、斯の如き犠牲の精神に富んで居る日本人に對して、基督の犠牲心を鼓吹するならば、恐らく世界に冠絶したる國民とお成りなさるだらうと存じて、明治七年から今日まで約三十年間、日本帝國の爲に盡して参りました者でござります、然し能く考へてみれば日本人の犠牲心は狹隘ではあるまいかと思ふ、何となれば日本人が犠牲と成てお死になさる場合は、主人とか親とか兄弟とか、日本人は日本人のためならば犠牲と

成てお死になさる、夫は結構であるが、更に他の國民の爲にも犠牲となつたといふ歴史がありや否や、彼のリヴングストンが鬼のやうな恐ろしいアフリカ人を、天使のやうな麗しい人物に感化して死んだ、ジャドソンはビルマの土人を濟度せんがために犠牲の死を遂げたといふが如き、日本人の犠牲心をモット廣く世界人道の爲に發揮して誠き度ものである、然せんには世界人類の罪を負ふて十字架上の犠牲とならせ給ひし、基督の博愛の心を心とするにあらざれば、その尊い犠牲心を世界人道の爲に發揮することは、不可能であると思ふ……

私に米國の大學を出た一人の教友があつた、彼は宣教師として支那に來て福音宣傳の爲に活動して居つた、所が、偶々北清事件が起つて續々外國人が殺されるので、妻と嬰兒を歸米させた、そして自分は、尙ほ支那人救済のために、砲煙彈雨のうちに健闘を續けてゐたが、戰雲いよ／＼險惡に迫つて、危機一髪の場合に臨んだ時、彼は最早これ迄と覺悟して、妻に宛てゝ遺言狀を認めた、其文に。

(…自分は今日まで支那人教化の爲に、努力を續けて來たが、もはや自分の生命は絶體絶命、愈々殺されて死んだならば、其嬰兒の成人を待つて、高等教育を施し、やがては宣教師として、我を殺した支那人濟度の爲に、支那へ送つて働かせてくれるやう、其嬰兒の教育を宜敷たのむ)。

と云ふ意味の遺言狀を認め終て、其宣教師は暴民の兇手に掛つて殺された、殺された者は米國人で、殺した者は支那人である、此米國人が支那人といふ他國民の犠牲となるのみか、憐れ遺されし嬰兒までも、己を殺した支那人の爲に、犠牲的の事業に參與せしむるといふ、此博い世界的の犠牲心は、之は何處から出て來るかと言はゞ、基督が世界萬民の犠牲とならせ給ふたる、基督の犠牲心から來たものである……私は明治七年に日本に來たが、當時の日本人は未だ基督教に就て理解がないから、屢々誤解せられて危険な機會に會つた者である、然し日本は段々文明に進んで來て、もはや今日、日本人が外國人を殺すやうな事はなさないが、まかり間違つて、日本人に殺さるゝやうな機會に會

うとも 私は日本人を愛して、日本の爲に働いて働いて、日本の土と成て死ぬる決心である……」

と、滔々數千言、熱涙を流してなされたる、デフォレスト博士の演説を承つて私は電氣に撲れたやうに感じたのである、彼れ外國人が、生れ故郷を棄て、親兄弟を捨て、日本に來り、殺されるとも日本の土と成る覺悟であるとは、天晴なる犠牲の精神である、彼れ宣教師が、斯の如き精神氣魄を以て、日本教化の爲に努力せらるゝのであるか、然るに我は日本の宗家でありながら、邦家の爲に如何なる奉仕を致せしか、口を開けば愛國心だの、不惜身命正法護持だのと、大言壯語を吐ては居るが、自分の實際生活を顧れば、彼等に及ばざる事遙に遠し、斯ては佛祖に對し、邦家に對して相濟まざる次第と、深く慙愧の念に驅られて立ても居ても居られなく成て、閉會するや匆々歸宅したのである。

第三章 新約聖書に接した時

▲新約聖書の返却

昨夜デフォレスト博士の演説に感激したる私は「基督の心」を深く學びたいと考へた翌朝はやく起床て聖書を買ひに出かけたが、當時神戸の書林に聖書がなく空しく歸宅すると、實妹の云ふには、聖書が入用なれば、宅の小兒の往く善隣幼稚園は、基督教主義ですから借りて來ませうかと、聽て保母から一卷の新約聖書を借りて來てくれた、私は早速馬太傳一章一節から讀み初めたが、人名ばかりで何の感興も起る筈がない、更にマリアが聖靈によりて妊娠したとか、二章には東方の博士が星を見れば、基督を拜せん爲に來たとか、異教徒の私には奇々怪々の記事ばかりで、失望せざるを得なかつた、イヤ然し此處は「馬太傳の一章二章」聖書の玄關口だから、モット奥座敷に入れば幽玄な哲理もあら

うと、一足飛びに最終の「黙示録」を讀で見ると、イヤハヤ白馬が出たの、赤馬が飛出した等の記事には、いよいよ出で、愈々奇なりで、全く失望して、私は此時「明治三十四年の初夏」より以前にも、度々聖書を讀だが、どうも眞意に觸れない爲が興味がなく止めた、矢張り佛教の唯識論や起信論の方が、哲學的で深遠で可いと考へて、借用した聖書を二週間の後に、實妹に托して幼稚園に返却に及んだのであつた。

▲哀む者は福なり

幼稚園から歸つて來た實妹が、保姆の忠言として、斯ういふ言を私に語つた「此聖書は差上げたものでありますから、お返し下さるに及びません、聖書は容易く解る所もありますが、また一度や二度よんだ丈では解らない所も多くありますから、モット熱心に繰返し、繰返し熱讀頑味なさるやうに」と、親切なる注意を添へて、聖書は再び私の手許に戻つて來た、保姆が折角の厚意を以て贈られたる聖書を、讀まずに捨置くも不本意と思ひ

再び馬太傳一章一節から、二章、三章、四章と念入りに讀んで往つたが、何度讀んでも判らぬ聖句は矢張り判らない、五章の四節に「哀む者は福なり其人は慰安を得なければなり」と仰せられたる、基督の聖言に接した時、ハテナ歡ぶ者は福であり、樂む者は福であるのに、哀む者はナゼ福であるか判らない、之には深き眞理のあることならんと、色々考へたが判らない、自分は永く佛教の修養いたしながら、歡喜も平和も希望もなくて全く悲觀してゐる、殊に病氣の爲に哀んでゐる、けれども何の福もない、然るに基督は何故に「哀む者は福なり」と仰せられたか、不審の雲は霽れなかつたが、忍耐して先きに先きにと讀んで行つた、よめば讀むほど判らぬ聖句が續出するので、之は素人流に一人で讀んでゐては兎手毛駄目だと思ふた、よろしく謙遜な態度を以て、教會の牧師から學ばなければならぬ事に氣がついた。

▲聖書研究の志願

さて聖書の質疑を、どこの牧師にお願ひしやうかと思ひし時、最初路傍説教を聞いて導かれた牧師にと、彼の三角帳場の教會に行つたところが、會堂の門は鎖されて且つ牧師館がない、近所で聞けば、日曜ならでは牧師は教會に來ないと云ふ、早く聖書の説明を聞きたい私、日曜まで待て居られないので、曾て一度入つたことのある、下山手三丁目のバプテスト教會を思出して牧師を訪ねた。

そして私は聖書を読んで居る者ですが、不明の點の御説明を願ひ度で参りましたが、と申し出た所が、兎も角もと、二階の一室に通された、挨拶が終つて後、私は既に讀んだ難解の聖句を、それから夫れへと説明を求めたところが、一々明快なる解説を承ること一時間半、私は成程聖書は深遠なもの、有益なものと思つた、僅に一時間餘の研究です。斯の如き智識と慰安とを得たからには、此聖書を二三ヶ月も續けて熱心に研究するならば、曠かしの多なる眞理と恩寵に浴するならんと信じて、私は牧師に斯う願つた。

私は近いうちに北海道に歸る者ですが、歸れば聖書研究などは出來ない境遇に居ります

ので、今のうちに研究いたし度と思ひますが、たゞ日曜日の研究だけでは不足を感じます故甚だ恐縮に存じますが、毎日私の爲に研究なさつては下さるまいかと願ひした、ところか、即ち「よろしい、明日午前十時に入らっしゃい」との快諾を得て、私は歡喜と満足を得て歸つて來た。

▲耶穌退治の辨士

既に基督信者となりし人には、日曜日の聖書研究にて可ならんなれども、神は判らず基督を識ざる、然かも痛く心の病み疲れたる私には、一週一度の研究では兎手毛満足を得られべくもない、娯樂や遊戯ではない、生命に關する重大問題なれば、至心全力を竭して眞剣ならざるべからずと考へて、毎日の研究をお願ひしたわけである。

さて保母から贈られた聖書を携へて、約束の午前十時に牧師を訪ねた、牧師は先づ敬虔なる祈禱を捧げられたる後、聖書を開いて馬太傳一章十八節から二章に亘つて懇懇に説明せ

られた、尙ほ不明の點をもお訊ねして、一時間半にして研究は終へた 此日も聖書の眞理に感じて、餓えたる時に糧を與へられたやうな心地で歸つて來た 斯くて毎日毎日、早ても、雨ても小休みなく續けてゐるうちに、五章、六章、七章の「基督の山上の垂訓」が終つた時、熟々自分の無知無學なることが慙愧に堪へられなかつた。

回顧すれば明治十七八年、京都の本山に留學の頃、京都に杞憂會なるものが設立された、會員は神官、僧侶、教員、國學者を以て組織されてゐた、會の目的は日本には神儒佛の三道あり、何ぞ耶蘇教を要せんや、寧ろ我國體に有害なりとして攻撃するのであつた、會員は猛烈なる反對演說會を各所に開いて、時人の喝采を博したものである、當時私も會員の一人として、黄口の雜僧でありながら、京都千本の劇場や、耳塚の劇場や、伏見、大阪、奈良地方にまで出張して、旺んに耶蘇退治を演つたものである、その昔の私が有名なる、「基督の山上の垂訓」、(馬太傳五章、六章、七章)を知らず、また其尊とき基督の御精神をも學ばずして、無闇に「耶蘇退治」を演ぜし當年の事を思ひ起して「盲人蛇に怖

ざる」愚者でありしを懺悔せざるを得なかつた。

▲舊き革囊に新酒

感謝と希望に溢ふれて「山上の垂訓」の研究が終り、尙ほ研究を續けてゐるうちに、馬太傳八章も済んで、當日は九章一節から十七節まで研究するのであつた、牧師は例の如く諄々と説明し來つて、其十七節に「新酒を舊き革囊に盛る者はあらじ若し然かせば囊はりさけ酒もれ出で、其囊も亦壞らん……と」仰せられたる、基督の聖言を釋明する牧師の説に。

「ユダヤ人は、革で拵へた囊を持って酒を買ひに行く、もし其革囊が舊くなれば力がぬけて破れ易くなる、破れ易い舊い囊に、新酒を入れるならば、囊は忽ち破れて酒は流れて了ふ、囊は破れて酒が流れて了へば一舉兩損である、かるが故に新酒を買はんとする者は、舊き囊を持って行くべきでない、新しき革囊を持って行くべきである、其新酒と

は何を意味するか、夫は新生命のことである、舊き革囊とは何を意味するか、夫は人間の舊い意志、舊い感情、舊い習慣、言ひ換れば罪咎に汚れたる人の心に準へて仰せられたのである、されば苟くも新生命を得んとするならば、先づ悔改めて新革囊のやうな清き心を有つにあらざば、新生命は其人のうちに來り給はない……舊い革囊のやうな心を有つて來るべきでない』。

と云ふことを、最も鋭く嚴しく反覆説明せられた時に、私は利劍を持ってサツト胸部を刺されたやうに痛く感じたのである。

▲舊き革囊の持主

自らを省れば、佛の教養をうけながら、有て生れた傲慢といふ舊囊の持主である、其心の囊には釋迦も祭つてあれば、弘法大師も崇めてゐる、種々の偶像も並べてある、金襴の袈裟に緞子の緋衣もある、賽銭箱も据てある、斯んな一心を以て基督の心を學んとする

舊き革囊の持主に、成程新しき酒、否新生命の來り給はぬは當然である、あゝ私は過つた事をした、と氣がついた時には背汗淋漓、赤面せざるを得なかつた。

私の佛者たることは、牧師に初對面の折から未だ打開けてない、聖書研究に袈裟法衣で往くわけでなし、浴衣着に麥藁帽でゆくのであるから、牧師は私の佛敎家たることを毫も知る由がない、其牧師の口から「舊き革囊に新酒を入れるべからず」云々の聖言をもて痛烈なる刺撃を私に與へられたのは、所謂「天に口なし人を以て言しむる」の類ひで、天は此牧師の口を通して私の心得違ひを戒め給ふたものと畏み懼れた、聽て研究が終へて歸つて來た。

さて翌日いつもの如く研究にゆくべき時間が來たが、どうしても往く氣になれない、なせなれば、「舊き革囊に新酒を入れるべからず」の聖言に戒められたる私は、其舊き革囊を捨てもせず、持たまゝでは何としても、神と牧師の前に出られなかつたのである。

▲青年信者の訪問

斯くて其日は研究を廢めた、其翌日も其また翌日も止めた、充分ではないが馬太傳九章十七節まで研究せしをもて可とした、これ以上深入りすれば、既得の佛教も、眞言宗も、寺院も、位置も、職分もみた棄てねばならぬ、夫は到底不可能の事である、いかに新酒が欲しければとて、此舊き囊を捨てるやうな狂氣じみた事は出来ぬ、反つて舊い葡萄酒は舊い囊の方が適當である位に考へてゐた、そして斷然聖書研究を止めて二週間も經た、其間、無斷欠席のよくない事を思はぬでもないが、どうも牧師館の闕が高くてゆかれない、マアいゝ、愈々北海道へ出立の際、一寸挨拶に往きませうと決めてゐた。

ところが一日、朝食を認めた所へ、教會員の一青年が訪ねて來た、「どうして近頃は教會に入らツしやいませんか、日曜にも祈禱會にも、アンナに熱心に入らした聖書研究にも、一寸も入らツしやいませんか、手紙を上ても返事はなし、訪問しても御留主であるし、

牧師も信者も皆で心配してゐるじやありませんか、サアゆきませう、サア」と、退引ならぬ場合と成た、私は「未だ舊い革囊の整理がついて居りませんから往かれませんか」とも言ひかねて、どうも御無沙汰して濟ませんでしたと、もはや遁れ能はぬ絶對絶命、否應なしに青年につれられて牧師館に往つた。

▲再び聖書の研究

牧師は喜んで迎へてくれた、暫らく見えないので禱つて居りましたが、よく入らツしやいました、サア研究を始めませうと、牧師は聖書を取り出した、サアまた「舊き革囊」が出なければ良がと、私は恟々焉してゐた、牧師は「馬太傳九章十七節まで濟んで、今日は十八節からですネ」と云ひつゝ、禱りませうと首を垂れて、久振りに來りし私の爲に、欣喜の祈禱と感謝を捧げられ、例の如く快活に明晰なる説明が終つて「……たとひ此兄弟に如何なる反對故障があらうとも、天來の靈力に導かれて、聖書の研究を續けしめ給へ、そ

して基督を信じて救の恩恵に浴せしめ給へ。」と眞實の範れる祈禱を捧げられて閉會を告げた。私は謝意を叙べて去らんとする時「明日も入らツしやいヨ」と勧められた牧師に、ハイ参りますと挨拶して歸つて来た。

さて翌朝、研究にゆくべき時が来た、同時に私の心に「舊き革囊に新酒を入れるべからず」と、鋭き囁きが起り初めたので、往く事を見合せやうと思ふたが、然し昨日私は「参ります」と、牧師に約束をした、定めし牧師は待てござるであらう、若し往かなければ、誠心こめて禱り下された牧師に對して相濟まぬと考へた、然し「舊き革囊に新酒を入れるべからず」と戒められた私は、此舊囊のまゝではゆかれない、さりとて参る約束せしを往かすには居れない、往くべきか、往くべからざるか、まア何とかなるだらうと、終に舊囊持参のまゝで出かけた。

第四章 聖書研究の結果は

牧師は待ててくださった、當日も研究に因て深き眞理を教へられ、翌日も其翌日も、毎日導かれ勵まされて居るうちに、馬太傳十章となり、十一章十二章と章を重ねて、二十三章の終りまで来た時、私の心に最も深く感銘したものが三つある、其一つは。

▲基督の事につき

私は基督といへば、ソクラテースや孔子や釋迦の如き、世界的聖人であると思ふてゐたところが段々聖書を研究してみると、基督は聖人以上の神の子であると信するに至つた、其重大なる理由の一は、基督は復活せられたといふ事である、金曜日十字架につけられて死に給ふた基督は、日曜の黎明に甦り四十日の間、弟子等の内に現はれて彼等を教育

し、遂に昇天なされて、今尚ほ我等のうちに生きて働か給ひつゝある方である、ソクラテスも死し、孔子も死し、釋迦も死せしが、基督のみは死して三日目に復活せられたのである、基督教徒を迫害したサウロは、後に悔改めて基督を信じて羅馬書を書いた、其一章四節に「…甦りし事によりて明かに神の子たること顯れたり」とある如く、死より復活せられたる基督は、聖人以上の神の子たる證據である、我等も此基督を信するによりて甦るのである、第二は。

▲父なる神につき

私は固より神の存在を疑はなかつた、然し基督教の神は、如何なる神かは知らざりしが恰かも子供に依て其父親の人格が解る如く、神の子たる基督に依て、父なる神は斯の如き神であることが解つて來たのである、聖書の哥羅西書二章三節に「智慧と知識の蓄積は一切基督に藏れあるなり」とある、藏れるといふ字は藏といふ字に譯してあるが、藏の中に

寶がある如く、基督といふ藏の中に神の智慧も知識も悉く藏つてゐるといふ事である、また同書二章九節には「神の充足る徳は悉く形體をなして基督に住めり」とある、神の愛恵、力の如き神の徳性は、悉く基督のうちに宿つてゐるといふ事である、されば基督の智慧知識を知るに依て、神の智慧知識が判り、基督の愛と恵が解るに依て神の愛と恵が判るのである、つまり基督を知ることによりて神が判るのである、斯やうな順序に依て、私は父なる神の實在を認めた時ほど嬉しいことはなかつた、お父さん、お父さんと泣き叫んで捜し廻はる迷兒が、突然父親に再會した時の歡びにも優りたる喜びであつた、人生に愛の父神を知らない人は靈界の迷兒である、迷兒は悲しきもの淋しき者である、私は此憐れなる迷兒生活より、天父の家庭に歸つて初めて安心満足を得たのである、基督の弟子が基督に對つて「主よ我等に父を現し給へ、然ば足れり」(約翰傳十四章八節)とお願ひせし時、基督は「我を見し者は父を見しなり」と仰せられたる如く、基督に依て父なる愛の神を認め得たのである、第三は。

▲自身の事につき

私は固より名僧智識ではない、破戒無慙の僧侶であつたが、斯まで腐れ果たる宗教家とは思はなかつた、然るに馬太傳二十三章の終りまで研究し來つた時に、私は神の聖前に驚くべき罪人であることを、最も深酷に示されたのである、同章には基督時代の曲學阿世の學者、偽善惡徳の宗教家が、基督から大叱責を蒙つたことが書いてあつて、言々句々峻烈なる聖言である、其廿七節に。

「噫なんぢら禍なる哉、偽善なる學者とパリサイの人よ、汝等は白く塗たる墓に似たり、外は美しく見ゆれども、内は骸骨と諸々の汚穢にて充つ、此の如く汝等もまた、外は美しく人に見ゆれども、内は偽善と不法にて充つ」。

私は此、「白く塗たる墓に似たり」と、叱りなされた聖言を學んで戰慄せざるを得なかつた、自分は白羽二重の白衣を着てゐるが、斯かく潔白な心はない、緋の法衣は被るが火の

如き赤誠はない、頭は剃れども慾は剃らず、法衣は染めても心は染めてゐない、錦襪の袈裟、緞子の法衣に醜軀を包んで看經禮佛をする、眞の神は之を何と知召し給ふぞ、佛を賣り法を賣つて渡世する賣主坊の生活、思へば想へば外形の美に反へて内面の醜、これ「白く塗たる墓」にあらずして何ぞや、深く自らを反省すれば、全く基督時代の偽善惡徳のパリサイ人以上の宗教家である事を戒められ、「汝等いかで地獄の刑罰を免れんや」(馬太傳廿三章卅三節)と仰せられたる、基督の聖言に止めを刺されて、釋然として其非を悟り、翻然として今日までの道徳上、精神上、宗教上の、あらゆる有形無形の罪を悔改めて、神の御許を願つたのである。

▲悔改めの源動力

人間が衷心から、神に罪惡を悔改めるといふ事は、全く神の聖働である、神は如何にして働き給ふかといふに、ムウデーは三つのものによつて働き給ふと云ふてゐる。

一 は良心である。如何に罪悪感の鈍き人も、罪咎のために良心の呵責に逢ふ時は、あゝ悪かつたと先非後悔するものである、夫は神は良心によつて悔改むべく働き給ふからである。

二 は聖霊である。いかに良心の昏睡状態にある者も、「良心聖霊に感じて」とある如く神の聖霊が働き給ふ時に、良心が覺醒せられて悔改むるものである。

三 は聖言である。聖書は神の聖言である、希伯來書四章十二節以下に「それ神の言は活きて且つ能あり、兩刃の劍よりも利く氣と魂また筋節、骨髓まで刺し割ち心の念と志意を鑿察ものなり」とある如く、權威ある神の聖言に依つて罪咎過ちを示され、教らへれ、剣られて悔改むるに至るものである。

以上の三つが一緒になつて人の衷心に働く時は、如何に頑冥な人でも悔改めるものであるが、一つ缺けても駄目だと、ムウデーは云ふて居る、全く此三つのものが一つに成て、私を悔改めに導き給ひしは、奇しき神の聖働である。

▲毎夜詩篇を讀む

至心至誠を以て神に悔改めたる私は、今後の宗教生活を如何になすべきかを考へた、其ころ私は新島先生の傳記を讀んで居たが、先生は毎夜詩篇を讀んで臥床に入ると書いてあるので、私も舊約聖書を求めて、其内の詩篇を毎夜よんでゐるうちに、一夜第百卅九篇を讀んだ所が、其一節に。

「エホバよ汝は我を探り我を知り給へり」

とある、もはや私は一心で居られない、神は我心を探り知り給ふが故に、更に二三節に「汝は我座をも立つをも識り又遠方より我念を辨へ給ふ、汝は我歩むをも我臥すをも探り出し我もろくの途を悉く知り給へり」

とある、神は私の行住座臥も、心の念も、今後の歩む道も知召し給ふが故に、自今わが宗教生活を、嚴然改めねばならぬと考へた、更に七、八節に。

「我いつこに行きて汝の聖靈を離れんや、我何處に往きて汝の聖前を遁れんや、我天に昇るとも汝かしこに在し、我わが榻を陰府に設くるとも、視よ汝彼處に在す」と、ダビデ王が神の普遍性を歌ひし此詩を讀んだ。私は、どうしても神の聖前から遁れて北海道に歸へり、再び寺院生活をする氣になり得ない、神は妙なる攝理の聖手を以て、我を悔改めと信仰にまで導き給ひしものを、なぞて再び佛教生活が出来やうか、さりとして佛教を棄て寺院を捨て、今後は如何なる事業に従事すべきかを躊りつゝ考慮へた。

第五章 余が舊生涯の概記

幸福なる哉、既に學びし馬太傳六章卅一節から卅四節までを讀んで見ると、「……然ば何を食ひ何を飲み何を衣んとて思ひわづらふ勿れ：汝等の天の父は凡て是等のもの、必要ことを知り給へり」と、基督は弟子等を慰め給ふた、神は私の生活上その必要を知召して、より以上の天職を授け給ふと堅く信じて、聊か思ひ煩らふ所はなかつた。まづ神の國と其義とを求めよ然ば是等のものは皆なんぢらに加へらるべし」と仰せられた故に、自分として先づ第一になすべき事は、神の國と義を求めらる事である、私は此約束の聖言を遵奉して、今後どんな事があつても、舊き生涯に後戻りしないと覺悟を決めた、さて私の前生涯は如何なるものか。

▲泉州堺市の出生

私は泉州堺市の商人、今井利平の五男に生れた者である、家は代々眞宗本願寺の門徒なるが、實父は河内の瀧谷山明王寺の信徒である關係から、當時の住職、中谷範壽僧正より弟子として舎弟が懇望せられたが應じないので、私が代つて小學校を卒へたばかりの、十三歳の秋季に入寺したのである。

▲河内の修學時代

住職は眞言宗内屈指の學者であり、其寺は富裕であり、寺内には三四十の僧俗が生活して居るので、淋しくも不自由もなかつた、住職は毎日私に眞言宗の小學林の科目ともいふべきものを教へてくれた、一日住職は京都の本山に行つてくるから、留守中に之を読むやうにと、多冊の元亨釋書をくれたのは嬉しかつた、私は興味を以て夫を讀んでゐた、聽て京都から歸つて、私に毎日三教指揮の講義を聞かせてくれた、之は弘法大師の青年時代の著書で、一寸六ケしいが仲々面白い、内容は儒教と道教と佛教に依て、蛭牙公子といふ

放蕩漢を教化するといふ、日本に於ける傑作の漢文小説である、私は之を學んで居る内に儒教よりも道教よりも、佛教は遙かに優越な宗教だ、教主釋尊は偉い方だと子供心に崇敬の念が起つて、沙門となる事を決心した、機縁熟して莊嚴なる得度式を擧げて、範壽僧正より私は範雅といふ戒名を授けられて沙彌と成つた、其後四度加行を修すること數十日更に護摩修行も終つて、尙ほ中學林の科目を日夜孜孜として學び勵んだ、斯して十七歳の春季二月、留學の爲に高野山に登ることに成た、他に數人の弟子達のある中から選抜されたる私の満悦は非常なものであつた。

▲高野山修學時代

元來師僧の學籍は新義眞言であるが故に、私は京都の本山にて修學すべき筈であるが、西も東も解らぬ雜僧が、華美なる京都生活は、反つて學業の進歩を妨げるものと見た住職は、先づ素養の出來るまで、人里離れた高野山に登山せしめたのは卓見であつた、住職よ

り三年間の學業年限を貫つた私は、明治十四年二月に登山して同年十二月末には全科を卒業した、之は河内の自坊にありし時、僧師より中學林の學科を考究してあつた爲に、高山野山では特別臨時試験を請願して卒業したので、試験委員を驚駭した、其内に傳法灌頂をもうけ、中流院の傳授までうけて、初登山以來僅かに十一ヶ月にして、河内の自坊に歸り、住職、信徒、親戚から歡ばれ、自分も得意で喜んだ。

▲京都の修學時代

當時高山野山では、漸く中學林の設立が出来たばかりで、未だ大學林の授業を初めてゐなかつたので、私は翌年の九月京都の本山で、大學林の科目を勉強することになつた、そして再び傳法灌頂をうけて、翌明治十六年一月廿七日、當時の眞言宗管長、大僧止三條西乘禪より、「教導職試補」の辭命を拜命する事になつた、之で先づ一ヶ寺住職の資格が出来たので悦んだ、時に年十九歳であつた、更に屈せず撓まず螢雪の功を積んでゐる間に

怪しくも自分の品性が知らず識らずのうちに、京都風に俗化せられてゐることに氣がついて、之ではならぬと飄然京都を去つて、眞言律宗の本山なる奈良の西大寺へ、戒律學と、因明論の研究に轉學することにした。

▲奈良の修學時代

當時の西大寺住職は佐伯弘澄和尚で、因明論と唯識論の學者であつた、齡ひ古稀に近き律僧に似合はぬ豪放な老僧であつた、私は學んだ戒律を守らんとしては破戒に陥り、護らんとしては脱線して、屢々其至難なるに煩悶した、居ること約二年にして、再び京都の本山に歸つて研學を續けてゐたが、いつとはなしに不眞面目にながれ、加ふるに學科は乾燥無味なので、自分は學者の師僧を有ちながら、徒らに本山廻りの勉學でもあるまいと、見切りをつけて河内の自坊に歸つて來た、そして師僧から教相や、聲明や、悉曇や、事相の傳授を受けつゝ、研鑽を怠らなかつた。

▲河内の住職時代

師僧範壽僧正は以前、嶋津公の祈願所にて維新前には五百石の御朱印を賜りし、日向の黒貫寺の住職で、學徳俊秀の聞き高く、三十歳にして寺社奉行時代に僧正に補せられ、維新後は新義眞言の智山派の一薦職に登りしほどの人物で、佛學漢學は勿論、國學者で歌人で、また書家であつた、斯様な師僧の薫陶をうけた私は、幸にも當時の眞言宗長者松平實因大僧止より、權律師に補せられて、瀧谷山の副住職となつた、時に年廿二歳、師僧を輔けて不動と寺務を執つて居れば可ものを、時勢の進運と、有つて生れた氣性は、安閑と山寺の和尙を以て満足ができなかつた、強ひて東都に遊學の素志を訴へたが容れられなないので、濟ぬ事とは思つたが、一路向學の念やみ難くて、副住職辭任の手續きを履んだ爲に、恩師範壽僧止より勸氣を蒙むつて痛く叱呵れた、斯くて自から紛々たる東京の俗渦中に投じた、あゝ危い哉、この若僧。

▲東京の苦學時代

師には學徳兼備の僧正を戴き、一寺の副住職として安穩に居らるべき私は、懐に一貫の學資なく、怒ろに我を指導してくれる先輩もなく、穢なき沖の捨小舟同様、飄然東京に來つて、晝間は某雜誌社の編輯員となり、夜間勉學の時を得て、數年を夢のうちに過した詩友天野勝彦が當時の我を。

寄二身王城一五星霜 一志憾軛臥三旅房 一管三靈辛賦一知二世態

云々と歌ひし如く、具に人間と世相を學ぶ時、恩父の病報に接し愕然として大阪に歸り父の病床に侍して看護數閱月、遂に療養相叶はず、七十三歳を一期として黄泉の客となつた、死ぬる臨終の際に、「我死なば早く佛寺に歸るべし」との遺言であつた、私は人生最大の悲愴を初めて経験し、慇懃に葬送の式を終へて、涙とともに大阪を去つた。

▲銚子町住職時代

東京を経て千葉縣銚子町の東岸寺に迎へられ、當時の眞言宗長者大僧正高志大了より、住職の任命をうけしは、明治廿八年七月四日であつた、爾來同寺の興隆と布教に努力せしかば、檀信徒は欣んで信服し輔佐してくれた、私は大阪から慈母を寺内に迎へて、孝養することが出来て喜んでゐた、偶々某本山の當局より、北海道札幌の寺院改革の爲に、轉任してくれまいかとの内交渉をうけた、之を聞いた東岸寺の檀信徒は轉任反對であるし、自分も慈母の孝養上、不可能の故を以て斷つた、然るに慈母の曰く、「折角の招聘を母の孝養上、謝絶するは母として佛祖に相濟ぬから、其懇請を容れて北海道札幌の爲に努力しては如何か」と、健氣なる慈母の奨励と共に、本山側よりは私の不在中は慈母を保護するからと、再三再四懇篤なる招聘をうけた、此に至つて檀信徒は斯かる榮轉を、反對する事は出来ぬとあつて、漸やく承認を得て轉任することに成りしは、明治三十年十一月であつた

同年八月廿五日附を以て、當時の眞言宗長者大僧正より、位一級をすゝめて「律師」に補せられた、數年教界から遠ざかつてゐたとは云へ、餘り嬉しく思はなかつた。

▲北海道住職時代

漸やく興隆のできた東岸寺と、信服された檀信徒と、慈愛の母とを銚子町に残して、肌膚も氷る北海道札幌に到着せしは、明治三十年の十二月であつた、驛に迎ひくれし信徒等と共に着して、翌朝信徒總代立會の上にて、寺務の引繼をうけたが、受繼ぐべき一錢の財産はなく、受けたものは莫大の負債のみであつた、剩さへ敷地は借もので、建物は某氏の別荘を借りた物である、寺院とは名のみにて實は俗宅である、前住職死亡後は、役僧二名、小僧一名と寺僕は居れども、無住同然の類廢、寺内は荒れに於て、疊は破れ天井は抜けて、憐れ無類の怪物寺である、孰れの寺院も多少先住時代の負債はあるが、此寺の如き經濟的にも、有形的にも、道德的にも、信仰的にも酷い破れ寺は珍らしい、どの方面

から改革の手を着けて可か途方に暮れて居た。

▲債鬼門に迫る

「這回、富貴なる本山から、持参金で新任職が赴任されますから、負債償却の義は夫れまでお待ち下さい」と、待たされてゐた債権者は、私の着任と聞いて先住時代の借金取りが、毎日入り變り立ち代り押かけて来る、自分は斯かる負債のある事を、赴任前には聞いてゐなかつた、従つて本山から一圓の償却金も托されて来ない、事實この寺に負債があれば、それは此寺の收入を以て辨償すべきもので、本山の與り知る所ではない、然るに新任住職は千兩箱の一つ二つは持つて来るだらうと、蟲のよい依頼心の漲つて居る所へ私 は空手で乗込んで来て、遁げるに遁げられず、居るに居られぬ、困難なる立場であつた、然し其負債たるや、もはや故人となりし先住職の私借であつて、寺借でない以上は氣の毒ながら債権者は、先住の墓場に對つて督促するより仕方がない、と三百代言流の理

窟を以て追ひ拂ふ譯にもゆかず、宗家として私の苦心したのはそこである、何故に本山の當局者は、以前は北海道第一の裕福であつた此憐はれの寺に、強ひて私を任命したものか？。

▲小樽に新寺建立

一日、新任の私に祝意を表するため、小樽から二人の信徒が来て、困難の立場に同情を表された、數日を経て同家に招かれ、家庭法話會を開いて、赴任以來第一回の布教を試みたところが、其後屢々同邸に招かれて、法話を聞いて努力を續けてゐるうちに、次第に信徒も増加はつて、遂に相結束して小樽に新寺を建立する程の、急速なる發展を遂げた、然し之が爲に反つて札幌信徒の反感をうけた、其理由は小樽に新寺を建立するならば、札幌寺院の衰微を來たすといふにあつた、然し夫は杞憂に過ぎない、小樽の新寺建立は小樽將來の發展上必要であると共に、自分は札幌の住職ではあるが、一面に於て開教師なれ

ば、小樽といはず餘市といはず、北海全道に涉つて開拓教導の職責上、小樽に新寺建立をしたので、少しも憚かる所がないと主張するのであつた、之は私が札幌に赴任後、漸く一年目の事業で、即ち明治卅一年十二月であつた。

▲内地に轉地療養

赴任以來、馴れぬ寒氣と戦ひ、厭やな債鬼と闘ひ、寺門の改革に、布教法話に、新寺建立にと、全力を擧げて健闘を續けてゐるうちに、健康に異狀を來して醫師の診察を受けたところが、本年の冬は氣候溫暖の内地に轉地療養すべしとの注意をうけた、一方に於て札幌改革の難局に處しながら、一面に於て小樽に新寺建立の事業は、かなりの難産であつた幸ひ札幌と小樽の雙兒は生れたが、不幸にして親たる私は、不健康の爲に倒れたのである、遺憾ながら健康恢復の必要上、暇かなる懐かしき銚子町に歸へり、更に慈母と同行して、神戸の實姉の許に立寄り、私は京都の本山に歸りしは、明治三十三年の十一月であつた。

た、當年の四月十八日附を以て、眞言宗長者大僧正原心猛より私は少僧都に補せられた。

以上は、私の舊生涯の概略であるが、回顧すれば、寔に耻かしき多傷多恨の私である幸ひに病氣恢復しなば、再び北海道に雄飛活躍せんと、神戸二之宮の縁家にあつて、専ら身心靜養の折から、奇しき神の指導を蒙り、ありがたき基督の福音に接する機会を得たのである。

第六章 余が新生涯の發途

▲浸禮式に與かる

過去二十有餘年間の佛者生活、然も波瀾曲折の多かりし生涯に於て、犯せしあらゆる罪咎を神に悔改め、基督を信じて救はれたりとの自覺を得て、豫ての「舊き革囊」を捨てることが出来た、そして神戸バプテスト教會に於て、吉川牧師よりバプテストマを受けて「新き酒」即ち新しき生命に浴するを得しは、明治三十四年八月廿四日の聖日であつた、其時の悦び其日の感謝は、私の曾て經驗せざるところの靈的誕生日であつた。

斯て一ヶ月二ヶ月と、宗教生活を迎へるうちに、曾ては天を怨み人を恨んで、憂心忡々たりし我が心的状態は、春風吹き初めて堅氷の解くるが如く、我うちに堅く結ばれし怨恨、懊惱の氷は、いつしか基督の春風に吹去られて、昨日に變る今日は平和と希望に輝き、歡

天喜地の新生涯に入ることが出来た。

▲先祖の罰あたり

天空快潤と云はんか、光風霽月と云はんか、心のどかに體ゆたかにして、泌々と基督の救の恩寵を體驗した私は、感謝に溢れて満足してゐたが、私か基督教に改宗した事を實妹が實姉に告げた、實姉は慈母に傳へ、慈母は親類に知せたので、一同は驚くまいことか、非常に駭いた、一日、私は神戸から堺市の親戚に招かれて往つた、うから、はらからの集まる席に於て、彼等は私に云ふ。

「：理由あつて佛門に獻げし身を、何故に耶蘇の信者に成たか」と、怖ろしい權幕を以て詰問するのであつた、私は、私の經驗せし基督の救の恩恵を、聖書を根據として説明したが、彼等は之に耳をかさない而已か「我々は祖先以來佛敎の恩澤をうけて居る者である然るに耶蘇敎に改宗するやうな事があつては祖先に對して忘恩の罪である、早く懺悔して

寺院に歸れば可、然ざればお前は先祖の罰當りだ」と、私は散々に包圍攻撃をうけたが、私は改宗の史的事實を述べて、「祖先の罰當り」でない事を立證して大に辯駁した。

▲改宗の史的事實

自分は眞言宗に屬する者であるが、宗祖は空海即ち弘法大師である、彼は元來三論宗の僧侶であつたが、支那に留學の時代に、慧果阿闍梨から眞言密教を學んで、大に感激する所あつて、遂に三論から眞言に改宗して、眞言密教の宗祖となつた人である。

法然上人は、元來天臺宗の僧侶であつたが、熊谷直實が發心得度して、法然の弟子となるといふ戰國の時代に於て、天臺のやうな高遠な宗教では、時代に適當しないと考へ、たゞ口に念佛を稱へて成佛するといふ、簡易な念佛爲本の淨土宗に改宗して其開祖となられたのである。

親鸞上人は、法然上人の弟子として、矢張り口に念佛を唱へてゐたが、口に稱へなくと

も、心に彌陀を信じて成佛するといふ、信心爲本の宗是を主張して、遂に淨土宗から眞言に改宗して、其開祖となられた人である。

日蓮上人は、もと眞言宗の僧侶であつたが、眞言秘密の法では満足が出来なかつた、鎌倉に往き、比叡山に登り、高野山に求め、四天王寺に學んで、苦心慘愴研究の結果、釋尊の大精神は法華經にあれば、其題目を唱へて成佛できると信じて、眞言から法華に改宗して、其開祖となられたのである、其他各宗の祖師方に就て研究するならば、孰れも、より善き時代相應の宗教を求めて、苦心研鑽遂に改宗せられたる史實に據り、私も基督教を學んだ結果、基督教に改宗すればとて、先祖に對して罰當りとは思はないと答へた。

▲眞如親王を見よ

眞如親王は、平城天皇の王子にして、眞言宗の僧侶として、弘法大師の弟子であつた、修養に修養を積んで、齡い古稀以上に達した時、より良き宗教を得んが爲に、身は皇族に

して、眉雪の老僧なるに拘らず、求法のために數人の從者と俱に支那に往かれた、檢索大に努めて而して理想の宗教を得ず、天竺に行かば必ず獲るならんと、遂に從者と共に渡天の途中、不幸、猛虎の群に會ひ、身に寸鐵を帶ざる眞如親王は、憐はれ從者と共に虎に食れて死んだのである。

彼等は何故に斯の如き冒險を敢てしたか、從來の舊きものを以て満足が出来なかつたのである、我等の祖先は深く時代思想の推移を考へ、より完全なるものを求めて、改宗せられたものである、されば私も「信仰に依て義とせらるゝ」といふ、此恩寵の基督教に改宗すればとて、祖先に對して相濟ぬといふ理由はない筈であると答へた。

▲外來文明の包容

ところが親戚の識者が云ふには「各宗の祖師等は佛教から佛教に改宗したからよいが、お前は佛教を棄て、ヤソと云ふ外教に改宗したから、罰當りだ」といふ、ヤソ教は外教

なるが故に、改宗して不可ならば、佛教も印度傳來の外教なるが故に、夫に改宗した我等の祖先も罰當りと云はねばならぬ、然るに我等の祖先は、そんな狹隘な思想を有つてゐない、儒教が入つて來れば容れて日本の儒教とした、佛教が來れば日本の佛教とした………獨逸の醫學、英國の海軍、佛蘭西の法律………凡て外來的文明を歓迎し之を包容同化して、今日の文明を作したものである、吳服屋の看板に「吳服」とあるのは、吳といふ外國の衣服である、外國の衣服でも之に改善を加へて、日本人に適すれば日本の吳服である、基督教は外教であつても、日本人を善化すれば日本の基督教である、我等の祖先が印度の佛教を容れて改宗せしと同様に、私も祖先の進取的精神に倣つて改宗したもので、寧ろ祖先の例に合つた態度である、自ら佛教信者と稱しながら佛教の研究もせず、基督教の研究もせずして、徒らに改宗を攻撃する事は、全く無意味の愚論であると同を深く戒めた。

▲家から放り出せ

この理窟に詰つた一同は、互ひに顔見合せて黙然としてゐた。「斯んな罰當りが我家にあつては、先祖に對し親類に對して、申譯がありませんから、家から放り出して仕舞ひます」と、慈母が云ひ出した。「夫が可でせう」と皆なが賛成した。

夫では何故私を出家させたか、出家とは家から出ると書くではないか、自分は十三歳の時、親の家から出て、既に出家したものである、然るに基督教に改宗の故を以て、再び家から放り出すならば、二度出家させる事である、出家は一度で澤山であると擲論つた。

「佛恩を忘れて改宗するのみか、そんな不滅口を叩く奴は、三年の間に口が曲るか、目が潰れるか、野倒死するが關の山」と私を罵つた。

私は眞理の爲なら、口が曲らうと目が潰れやうと遺憾はないと演り返へし、「眞理は最後の勝利」といふ言もあれば、まア見て居て御覽なさい、と云ひ残して歸つて來た、途中、彼等の頑冥を悲むと共に、心の内では泣いて禱つてゐた。

神戸二之宮の實妹の宅に歸ると、其良人が旅行から戻つてゐて、私の改宗問題の經緯を

聞いて、深き同情を表して云ふには、「私共が佛教が良いか、基督教が良いか、全くの素人で判りませんが、貴兄は少年の時から修養せられた、宗教的智識を以て改宗せられたのであるから、まア基督教が良いと見ねばならぬ、されば今後は其可とする方面に、全力を以て邁進してください、そして幾日でも拙宅に居らして、充分に基督教を研究してもらひたい。」と意外なる援軍を得て、私は感涙禁じ得なかつたのである。「基督教の苦み我等に多くあるが如く、我等の慰安も基督によりて多くあればなり」(哥林多後書一章五節)とある如くあゝ神の恩恵は讀むべき哉。

第七章 今後の使命に就て

六二

▲日々早天の祈禱

當時の私は妻も子もなき獨身者なれば、今後の生涯を孤兒院の事業に獻げたく思ふてゐた、然し夫が果して神の聖旨なりや否やを確認せんがため、毎朝未明のころ布引の山に登つて、至心を以て神の指導を禱るのであつた、斯て五日目の朝、即ち明治三十四年十一月二日の午前六時、祈禱を終へて山から歸宅して、午後、實妹の小兒をつれてタムソン宣教師の夫人を訪問した、夫は實妹の小兒が同夫人の經營せる、善隣幼稚園の生徒として、教育をうけてゐる關係から、實妹夫婦に頼まれて御禮に行つた譯である。

タムソン先生は神戸浸禮教會の宣教師なれば、いつも教會では面會するが、其邸宅に訪ねたのは初めてである、同先生の云ふには、「貴下は何時神學校に入學なさいますか」と訊ね

られた、私は傳道者として召れた者か何うか、未だ自信がありませんし、受浸以來二年未滿の者は、神學校に入學不可能の規定なれば、私には入學の資格がありませんので、岡山孤兒院の働きを致したく思ふて居ると答へたところが、「明晩、横濱バプテスト神學校長デーリング博士が來宅せられますから、ぜひ一度御會見ください」と勧められたので、會見する約束をして歸つて來た。

▲デ博士と初對面

翌晩ともかくデーリング博士に面會せんと、約束の時間に出かけて暫し待つ程に、デ博士は京都浸禮教會に於ける按手禮式を終へて、タムソン先生と俱に來邸せられた。

博士は初對面の我に、十年の知己に接するが如き、打ち解けたる懇談中に、「今まで、どんな學問せられたか、宗教的體驗は如何に……」などの試問をうけたが、學文は無し智識は無し、宗教的體驗も貧弱なる旨を答へて、佛敎家たりし事は語らなかつた、一概に佛者と

は云ふものゝ、上は紫衣の管長から下は托鉢僧まで、皆な佛者であるか故に、自分を證
明せんには、學林の卒業證書、住職任命の辭令、職級の辭令書などを見せたいが、旅行
中なれば立證すべき夫等の材料は何も携帯して居ない、然るを慙か佛者であると云はゞ
餘計な疑惑を起すであらうと差扣へ、博士にも其他の方にも、聽て北海道よりの書類到着
を待つて、身分の棚おろしをする積りで、此場合くわしい事は語らなかつた。

デ博士と一時間餘の會談に、博士はどんな感じを有れたか知らないが、私は終生わする
べからざる好感を與へられた、尙ほ聞きたい事、申上たい事もあるが、實はまだ夕飯前な
ので、明朝九時に、モ一度お目にかゝる事が出来ますまいか」と博士は云はれた、私は再
會を約して九時に同邸を辭した。

翌朝再會の時に、博士は喜色滿面に溢れて云ふ、「貴下の從事せんとする慈善事業は固よ
り大切であるが、夫は他に幾らも其人があらう、貴下は神に献身して、傳道の爲に働くべ
き方と私は信ずる；たとひ神學校の規則は如何にもあれ、破格を以て入學を許すから來

てはどうか、或は亦明年一月早々講習會が開かれるから、講習生として來り、夫から續い
て勉強されても可から、どちらか祈禱に依つて神の導きを得られよ」と、寛大なる便宜を與
へられた。

さらば熟慮と祈禱の後、御挨拶いたすべきを約し握手して別れを告げた、こは明治卅四
年十一月四日の朝であつた。

▲早天祈禱の應驗

我の使命は執れにありや、慈善事業か將た傳道か、と聖旨の程を伺ひつゝ、毎朝布引山上
祈禱の最中、見えざる神の聖手は、初めて我をタムソン教師館に導き、更に神學校長に會
見せしめ、然かも其校長に依つて、傳道は人生最高最善の事業なるを深く教へられ、さては
神學校に破格入學の特典を與へらるゝなど、思へば想ふほど神は我を傳道界に献身すべく
導き給ふ、あり難き神の聖旨と確信して、岡山孤兒院ゆきは聖心にあらずと斷念した。

神は連朝の祈禱に應へて、今後の天職を斯も明白に示し給しのみならず、自分の佛者たる事を知らざる、校長デ博士を通して與へられたる、此特殊の知遇に感激して、神の聖名を讚美せざるを得なかつた、改宗せしが故に親、兄弟、親戚に捨てられたる私は、「我に就る者は我かならず之を棄てず、(約翰傳六章卅七節)」と、仰せられたる基督の御約束を實踐して、無限の喜悅に溢れて感謝の涙禁じ得なかつた、いよ／＼校長の勧めに従ひ、翌年一月七日神戸を出發して、横濱バプテスト神學校講習會に出席して、校長デ博士の歡待と指導をうくる身となつた。

第八章 未熟者の實地傳道

▲傳道の爲に献身

日々各講師より基督教の智識、眞理を學びし私は、増々神の恩恵を感銘して、いよ／＼傳道の爲に献身すべき決心を堅うした、其時自分は信仰に就て斯う考へた。

信仰の要素は服従のみでは足りない、信心のみでも足りない、どうしても喜捨であらねばならぬ、他人は何を献げて基督者に成たか、何を献げて傳道者となつたか、他人の事は知らない、私としては献ぐべき財産も學殖もない、たゞ少年時代より努力と修養に依つて得た所の、住職の位置と、其寺院と、少僧都の職權と、眞言宗と、佛教とを、悉く神に獻げたく思ふた、自分は甚だ穢れ果てたる傷物ではあるが、神が潔めて受け給ふならば、悦んで之を獻げたく想ふた、そこで羅馬書十二章一節の「其の身を神の意に適ふ聖き活る

祭物となして神に献げよ是れ當然の祭なり」との聖言に従ひ、罪惡に汚れたる我が全心全靈全生を潔めて受けさせ給へと禱るのであつた、そして一大決心を以て神に献身したのである、世人は之を聞いて發狂者と嘲笑うであらう、嗤はば笑へ、我には私の信仰がある、信仰とは服従であり信任であると共に、喜捨であらねばならぬからである。

▲瀬戸内海へ初陣

斯くて講習會が終り、續いて神學生として、學ぶこと三ヶ月にして學年の終りが來た、五月一日から九月初旬までは夏季休校である、校長は私に「休校中、神學生諸氏は實地傳道に従事するのですが、貴下は福音丸の傳道に往つて貰ひたいが」との相談であつた、私は講習生として神學生として、僅々數ヶ月の淺薄なる智識では、未だ「實地傳道は出來ません、殊に瀬戸内海に傳道する福音丸の事業は、微力なる私には兎手毛不可能であると辭退した、けれども校長は承知しない、福音丸の事業は困難である、然かし貴下

が往くならば、確かに成功すると私は信ずる、また船長ビツケル氏も歡んで待つて居るから往つてくれと勧められた」私は數日の猶豫を願つて、よく禱り能く考へた末、成敗如何は神の聖手に托して、須らく初陣の靈戦に出征すべしと決心した、其挨拶を校長に申出たところが非常に喜ばれた、そして校長と平伏して初陣の祈禱を捧げた。

總て感謝と勇氣に溢れて横濱神學校出發、備後國糸崎港にて船長ビツケル氏に迎へられ福音丸に搭乗したのは、明治三十五年五月五日、今から二十六年の昔日である。

▲福音丸より凱旋

福音丸乗船中は、ビツケル船長と力を併せて、連日連夜勇戦四ヶ月にわたる、此間ビツケル船長の人格、信仰の感化をうけると共に「蛇の如く敏く鳩の如く溫柔き」船長の性格より案出さるゝ、實地傳道の作戰計劃は、一月から四月まで學びし神學校の智的研究と相俟つて、傳道者たらんとする私の將來に、甚大なる裨益を與へられた。

斯て福音丸傳道の初陣は、多大なる祝福により戦勝を與へられて、横濱神學校に凱旋せしは、開校式の前日九月初旬であつた。

寄宿舎の自室には、既に筵包の荷物が北海道より到着してゐた、早速それを解いて十三歳の沙彌時代からの學業證書、學林の卒業證書、管長より仕職に關する辭令、職級昇進の辭令書の他に、水色の紋綸子の法衣と、金襴の五條袈裟と、水晶の大念珠を證據品として携帶、瀬戸内海よりの旅装の儘にて、デーリング校長を其教師館に訪ねた、既にビツケル船長より夏季中の戦勝報告書を受けてゐたデ校長は、莞爾として凱旋の一兵卒なる私を歓迎して慰勞せられた、福音丸の聖戰談一通り終つて、私は校長に改めて申述べた。私は元來眞言宗新義派の僧籍に屬する者でありしことを、書類を示して、懺悔譚と學業の經歷を叙べたる後、身には水色の法服を覆ひ、金襴の袈裟を纏ひ、左腕に水晶の念珠をかけて、校長夫妻の面前に立つた時は、驚異と感激にうたれて睜つて居られた、私は疾に斯る身上を打明ける筈でありしが、今日まで是等の證據品を得ざりし爲、沈黙に附してあ

りし次第を詳細に告白した時、校長夫妻は感涙を湛へて歎んだ、私も喜んで、初陣に戦功を與へられたる、神の恩恵を感謝して祈禱を捧げた。

そして私は校長に申した、昨年十一月四日神戸で初對面の時、先生が破格を以て私を神學校に導き給はずば、私は孤兒院に行つたであらう、然るに左はなくてやみしは、偏に神の指導であると共に、先生の鑑識と寛大が、私をして今日あるに至らしめたる所以を感謝して、先生の恩徳に報ゆるに、左腕にかけし水晶の大念珠を記念品として呈贈して寄宿に歸つた。

▲實妹と母の入信

翌年の夏季休校にも福音丸傳道に招かれ、再び瀬戸内海の爲に健闘を續けた、此時すでに徳島市に移轉してゐた實妹は、不思議なる神の導きを蒙むり、神戸バプテスト教會員と成てゐたので、慈母に孝養しながら懇切に福音を傳へてくれた、幸ひ母は同市の聖公會に

導かれて、貫牧師から洗禮を受けて信者に成た、といふ通知を實妹から得た時の嬉しさは筆にも言にも表はし難き満悦であつた、福音丸の夏季傳道が終へて、徳島市に實妹を訪ねて、私を「罰當り」と罵りし慈母に面會せし時は、實に感慨無量であつた、「眞理は最後の勝利」を、私に得させ給ひし神の聖前に、うから、はらからと感謝の集りを開きし時は、喜びの感涙滂沱としの學業を卒へて、大阪バプテスト教會の傳道師となり、後ち按手禮をうけて牧師と成て、慈母を徳島より大阪に遷へて、再び母子同様の欣喜を興へられた「目が潰れるの、口が曲



(革井今の代時師牧)

て、餘りの嬉しさに、讚美歌が能く歌へなかつた。

尙ほ慈母の孝養を實妹に托して、自分は横濱神學校に歸り、前後四年

るの、野倒死が關の山」と、私を罵倒せし親類の没禮漢も、交るゝ我家に來つて、昔日に變る今日の牧師生活を見て、大なる福音の力に感心して了つた。

▲革と改名の理由

想起せば未だ基督教に接せざる、明治卅四年一月元旦の未明に、易の「澤火革」の卦に相當した時「第一章の初に叙し如く」本年中に革新する云々の註解を讀んで、如何にして革新するかは不明であつたが、神の指導により聖書研究の結果「信仰によりて義とせらるゝ」の聖言を確信して、基督の救に浴して以來、我宗教心も精神も品性も道徳性も、總てが革新されたる私は「十字架の教は沈淪者には愚なるもの」であつても「我等救るゝ者には神の能力」たることを、感謝して證明せざるを得ないのである。

私の入信當時の名は「範雅」であつた、之は眞言宗の得度式のととき範壽僧正より授けられたる法名である、然るに基督を信する信仰に依て、身も靈も革新せし故に、革と改名し

たく思ふて、大阪市役所に改名の願書を差出した所が、改名は相成らぬとあつて却下された、其時、私は二十有餘年間、佛の教育を受し事、後ち基督教に依て革新された事、革の字は易の「澤火革」の卦より採りし事を、當局に詳述した所が、夫は面白い御経験である「夫ではモット詳しく願書に認めて提出せられよ」との事により、其顛末を詳記して再び差出した所が、其後、改名は許さないのであるが、貴下の宗教的経験を尊重して特別を以て許します」とて、革と改名は許可された一人、基督に在るときは新に造れたる者なり舊きは去りて皆な新しく作なり」(哥林多後書五章十七節)との聖言は、私に於て實現されたのである。

第九章 余が改宗後の概記

▲二十數年間の祈禱

改宗後の私は神學校を卒業して、大阪バプテスト教會の牧師たること七年、後ち東京深川に傳道館を設立して、福音宣傳の爲に活動すること數年、後ち神學校教授となり、遂に全國巡回教師として今日に至りし者であるが、回顧すれば二十餘年の昔、神學校在學の當時、一大目的を立て、ひたすら神の佑助嚮導を禱り覓るのであつた。

其目的たるや米國の基督教界と、基督教と教育の關係、基督教と家庭の關係などを、視察したいとの念願であつた、其動機は當時の神學校長デーリング博士といひ、新約聖書の學者ベンネット博士といひ、舊約聖書の權威ハリントン博士といひ、説教學と教會歴史のバーシユレー博士といひ、孰れも豊富なる學殖と立派なる人格者であつて、日々接す

る毎に深き感化を受けし私は、其本國なる米國宗教界を視察するならば、多大なる見聞上の智識を得て、今後の傳道界により以上の貢献をなし得ると信じたからであつた、が私には海外漫遊の資力はなし、また後援者もない、然し無限の富と愛を有せ給ふ神の指導を蒙むる時は、必らず目的達成の機會を與へ給ふと信じて、神學校時代から二十數年の間、「沮喪すまじき爲に」(路加傳十八章一節)忍耐の祈禱を續けてゐた。

▲海外傳道の使命

ところが明治四十年の頃、在米の教友より傳道の爲に招かれしが、當時は大阪バプテスト教會の傳道教會の責任上、海外漫遊は許されなかつた、其後大正七年米國バプテスト教會を巡教するべく、外國傳道會社より招かれしが、家族の病者に妨げられて止んだ。大正九年の初秋、巡回教師となりし時、偶々歸朝せし教友より、在米同胞の生活状態や、排日問題の起因や、在米の佛影會や、日本人基督教會の現狀に就て具さに聞かせられ

巡教の切要を勧められた時は、雄心勃勃として禁じ得なかつた、其後大正十年の冬季、布哇と加州の教友から、書狀を以て懇切に渡布、渡米の傳道を奨励せられた、此に至つて、恰もトロアスに下りしパウロが「マケドニアに涉りて我等を助よと曰を幻に見たり」主の我等をしてマケドニア人に福音を宣しめんと、我等を召給ふことを推量て、直にマケドニアに往んとす(使徒行傳十六章八九十節)との、パウロの所感に共鳴して、私は只管、布哇と在米同胞の救靈に就て考慮し、且つ神の指導を禱るのであつた。遂に今回こそは多年の祈禱に應へて、神が與へ給ひし時節到來と確信して、布哇と加州に雄飛すべき答書を發した、そして出立の用意と戰鬪準備を整へ、奮然起つて海外傳道の使命を奉じて、横濱出帆の天津丸に搭乗せしは、大正十一年十月十六日であつた。

▲布哇から米國へ

同年同月二十五日ホノルルに上陸するや、各派の牧師等と有志諸氏の歡迎をうけ、午後

七時半よりヌアヌ教會に於ける、聯合大祈禱會を以て、いよく開戦の火蓋を切つた、翌日より連日ホノルルに於て活動中、奥村牧師の令息梅太郎氏が私に云はるゝに「貴下をして深く感動せしめた、彼の北清事件の當時、支那人の犠牲と成て死んだ宣教師は、ピテキンスの事であるが、彼はエール大學の出身なれば、今回の渡米を幸ひに是非エール大學を視察なさい」と、同氏は同校出身の故を以て勸めてくれた、其後ある日、布哇大學の教授原田博士よりお招きをうけて晚餐の饗に預りし時、「渡米なさるに就て私に出来る事なら何なりとも御遠慮なく」と、懇篤なる博士の厚意に甘えて、私はエール大學への紹介をお願ひした、博士は直ちに同大學の神學校長ブラオン博士に宛て、懇ろなる紹介状をくだされた。

艦で布哇群島に渡つて連日連戦、五十有餘日の健闘を續けて、祝福されたる運動は終結を告げた、十二月十六日ホノルル出帆、ロスアンゼルスに着せしは十二月廿三日、クリスマスの前日であつた、同月廿七日羅府の日本人基督教會に於て、各派教會牧師諸君の歓迎

に預り、其席に於て南カリフォルニア諸教會巡教のプログラムを作製して、愈々大正十二年一月七日、羅府に於て開戦の烽火を揚げた、爾來轉戦また展戦して三月八日、南加州の聖戦全く終りを告げ、中央カリフォルニアに轉戦、更に北加州に展戦して、全加州の運動の終りしは四月三十日であつた。

▲エール大學にて

五月十日、一教友と共にサンフランシスコを出發して、途中オグデンの日本人教會と、米人バプテスト教會と、ソートレーキの日本人教會に迎へられて開會、更にデンバーの日本人教會に轉戦、夫からシカゴ、アトランチックシチー、ワシントンデーシー、フネラデルフ、ヤ、ニューヨーク、ボストンの米人バプテスト教會を歴戦して、ニューヘボンの米人バプテスト教會に迎へられて講演せしは、六月十九日の夜であつた、翌朝原田博士の紹介持参で、エール大學にブラオン博士を訪ねたところが、恰好卒業式の最中であつた、暫

し禮拜室で式の終るを待つ間に、校内を見物せんと廊下に出た所が、其左右の兩側にある多數の記念の銅像を見て、之は孰れも本校出身の傑物であらうが、之は誰かと。

先づ右端にある、高さ五尺ばかりの大理石の上に置れたる、半身の銅像の前に立つて、其大理石に彫刻してある略傳を讀んでハット吃驚いた、之は私が寝ても醒ても忘るゝ事の出来ない、我を基督に導きくれし、故ピテキンスの銅像であると判つた時に、無限の感慨に溢れて、遠く北清事件の昔時を思ひ、殺されたピ氏の臨終を憶ひ、遺族の安否を想ふて徘徊去ることが出来なかつた、寫眞機を取り出して見たが、廊下が薄闇いので撮影できざりしは遺憾千萬であつた、私は甚深なる感激にうたれつゝ、手帳に其傳記を記寫した、其碑文は斯うである。

In Memory of
HORACE TRACY PIKINS
Born in 1869 at Philadelphia,
Graduated
In 1888 at Exeter Academy,
At Yale College in 1892,
At Union Theological Seminary in 1896,
Three Years Missionary in China.
Killed at his Post in Paotingfu
By the Boxers July 1st 1900.

とある、今これを邦文に譯して。

「ホレース、ツレーシー、ピテキンスの記念の爲に
千八百六十九年フネラデルフネアに生れ、千八百八十八年エックスターアカデミー卒

業、千八百九十二年エール大學卒業、千八百九十六年ユニオン神學校卒業、後ち宣教師として支那に働くこと三年間、千九百年七月一日任地奉天府に於て、義和團のために殺された。

記寫し終つた時、卒業式が済ましたと聞いて、ビ氏の記念銅像に惜しき別れを告げた。

▲ビ氏遺族の健在

エール大學の廊下にある、多くの他の銅像を見やらぬ前に、私が先づビテキンスの銅像前に来りしも不思議……只今卒業式が終りしと聞いて、教友と共にプラオン博士に會ひ、原田博士の紹介状を渡して、自分の今日ある所以は、神の恩恵であると共に、御校出身のビテキンスの感化であるが故に、満腔の敬意を表する爲に、本日本校に來れりと挨拶の辭をのべし時、博士は謹嚴なる態度を以て、起て再び堅き握手せられた……。

私は故ビテキンスの遺族は、今尚ほ健在なりやを訊ねしに「夫人はミルバレーに住つてゐるが、令息はフ・ラデルフ・ヤ大學で醫學を學んでゐる、追て神學を學んで卒業の上は亡父の遺志を繼いで、父を殺した支那人教化の爲に、宣教師として行くべき準備中である」と聞いて、私は再び深大なる感激にうたれたのである。

世界に宗教は澤山あるが、親を殺した其敵をも愛して、今尚ほ敵の爲に基督の恩恵を傳へんとする宗教は、基督教徒の外に何所にあらうか、私は深く感心して、ミルバレーは如何に遠からうとも、遺族を慰問したいと考へた。

馳てプラオン博士に別れを告げてエール大學を辭し、ブリッチボート、ニューブレッツトン、ハートフォード、ローチエスター等の米人バプテスト教會に轉戦して、バファロー、ナイアガラを経て、再びシカゴに來り米人教會と日本人教會の集會を終へて、キヤンサスシチーのバプテスト教會に來り、更にトベカの教會に轉戦して、之にて全く米人バプテスト教會の運動は結了した、時は大正十二年七月上旬であつた。

▲ビ氏の遺族慰問

トベカを發車してデンバーを過ぎ、オグデンにて教友柴田春江氏と別れを告げた、同氏は私の東部旅行について、同行者と成て多くの便宜を與へられたが、愈々サクラメントに歸任するに際して、堅き握手を交して謝意を表した、同氏は櫻府へ歸り、私は單獨旅者と成て、スポーケンにて山鹿牧師に迎へられ、日本人メソヂスト教會にて開會、ヤキマ、アバトの日本人教會に轉戦して、シヤトル各派聯合の傳道會に招かれ、タコマを終へて、更に英領加奈陀に轉戦、バンクーバーとニューウエストミンスターから、再びシヤトルに歸つてポートランドに展戦、之にて在米日本人教會の大運動は全く終りを告げたのでシヤトルから歸朝せずと、友人から勧められたが、ビテキンスの遺族がミルバレーに健在と聞きながら、慰問せずして歸朝せば、終生會見の時機やならん、さらば悔ゆとも及ばじと思へば矢も楯もたまらず、午前十時ポートランド發の列車に搭じて、サンフラン

シスコに着せしは翌日の夕方、即ち七月卅一日の午後六時過ぎであつた、幸ひ秦牧師の出迎ひをうけて同家の客となつた。

翌朝、櫻府から柴田牧師が、私に桑港の見物させたいと、自動車で来てくれた、厚意を謝して同乗、バプテスト傳道局に到り、東部の巡教終つて歸朝の挨拶の後、組合教會の傳道局に電話をかけて「今から廿數年前の北清事件の際、支那人の犠牲と成たビテキンスの夫人は、ミルバレーの何處に居らるか」と訊いた所が「同夫人は過日桑港で自動車の衝突の爲に負傷して、ブロードウエーの病院で治療中であるが、其後經過良好なれば、或は病院で面會できるかも知れない」との回答を聞いて、驚きながらお見舞として途中、匂ひ高き紅白の薔薇の花を購求めて、其病院を訪れた。

▲ビ氏夫人に會見

私は先づ受附看護婦に、ビテキンス夫人に面會を覓めたところが、何の爲かと不審がる

そこで主人ビ氏の犠牲の事から、自分の改宗の動機に就て概略を話した時に、駭き顔の看護婦は、ビ氏夫人の病室に行つた、直に出て来て云ふには「只今、睡眠中ですから、暫時お待ちなされるか、それとも出直して来るか、と訊く、待て居ると答へて待つこと三十分餘再び看護婦は病室に往たらしく、出て来て云ふには「お目醒めになりし夫人に、貴下の來意を傳へた所が、何卒こちらへと仰せられました」との言に、エレベーターで四階の病室に導かれた、雪白の臥床に仰臥せる夫人は、些し顔を横にして私に「起きて御挨拶する筈ですが、負傷の爲に失禮ながら御免ください」と云ふ。

そこで二十三年前まで佛教家たりし自分は、御主人ビテキンスが北清事件の時、殺害されんとする危機一髪の際、其獨子なる嬰兒の成身を待て、自分を殺した支那人の爲に、宣教師として努力せしむるやう、其教育を良布く頼むとの遺言狀を認めて、聽て犠牲の死を遂げられたる事實を、今から廿有餘年前、神戸に於て故デフォレスト博士の演説に依て承はり、基督の十字架の感化の偉大なる事に深く感じて、遂に聖書研究となり、

果は基督の教の恩恵を體験して改宗せし者である、今回布哇、加州の日本人傳道者の爲に招かれ、幸ひ東部米人バプテスト教會の巡教に際して、エール大學にプラオン博士を訪ひ、ビ氏御遺族の健在を承はり、滿腹の欣喜を以て、本日こゝにお見舞をかねて、敬意を表する爲に來りし者である……

彼の北清事件の際、御主人を支那に遺し、嬰兒を抱いて歸米なされた、夫人の苦辛は如何ばかりでありしか、聽て御主人が殺された事を、お聞きなされた時の悲歎は如何なりしか、私は萬斛の同情を表する者である、然し私は御主人の死に依て基督を信じて生命を得た者である、若し御主人の死なくば、基督の十字架の深き恩恵は解らぬであらう……教はれて以來二十數年間、主の爲に奉仕の生涯を辿り來りしは、偏に神の恩寵であると共に、御主人の犠牲的感化である、是等の事實と、主の仰せられたる「一粒の麥もし地に落ちて死すば唯一にて在ん、もし死ば多の實を結ぶべし」(約翰傳十二章廿四節)の聖言を思ひ併せて、せめてもの慰めとして載きたいものである……。

と申のべた時に、ピ氏夫人は兩眼より流るゝ熱涙を拭ひながら。

「主人は支那の奉天の附近で殺されたが、其後記念會堂が其處に建てられし程、神の榮光が顯はれしなれど、日本に於ても貴下のやうな方が、基督者になられたと云ふ事は、只今初めて承はり、斯んな嬉しい事はありませぬ……」。



(婦護看・革井今・人夫氏ヒ)

として渡米し、本日こゝにピ氏夫人に面會の機會を得たるを喜び、教友柴田牧師に依て記念撮影の後、貴女の令息は今いづく

と泣いて歎ばれた、私は廿數年間の祈禱の應驗に在るか、と私は訊ねた。

「彼は貴府大學で勉強中であるが、最近亡父の遺言に従ひ、宣教師として支那に往く

積りである、只今夏季休暇のため歸宅中でありしが、數日前紐育にゆきしは遺憾である若し本人が貴下に會見するならば、どんなに悦ぶ事であらうに……」。

と、またも落涙にくれた、お歸へりに成たら吳々よろしくと傳言を托し、互ひに惜別の辭を交し、一日も早く健康回復、退院の日を祈る旨をのべて暇を告げた、そして數日を経て桑港出帆のサイベリヤ丸にて、私の歸朝したのは大正十二年八月廿三日、即ち大震

大火の一周間前であつた。

第十章 改心改宗の基因

以上申し演じたやうに、永い間の佛教生活は私に眞正の満足がなかつた、たゞ佛を售り法を賣つて生活するには、至極呑氣で何の不自由もなかつた、然しながら冷靜に眞面目に自分の佛者生活を考へる時は、心に平和も安心立命もなかつた、斯る時に基督教に接して初めて安心と満足を得た、遂に佛教を棄て寺院を捨て、改心改宗するに至つた、今之を繰返して考慮してみると、其基因ともいふべき三のものがある。

一 聖書の絶對權威

聖書は「神の默示」なるが故に權威である、「凡て勞れたる者重きを負る者は我に來れ我なんぢらを息ません」(馬太傳十一章廿八節)との基督の聖言を讀んで、身心ともに實れ果た

る私は、教會に導かれた、「キリストイエスの心を以て心とせよ」(腓立比書二章五節)の演説を聞いて、「基督の心」を學び度て聖書研究を始めた、「聖書は爾をしてキリストイエスを信するに因て救を得しめん爲に智慧を與ふるもの也」(提摩太後書三章十五六七節)とある如く、私に智慧を與へて救に導いてくれた、其聖書を保姆が私に贈てくれた、夫を讀み夫を學んで、「信仰によりて義とせられ」て、基督者と成て満足を得た。

二 義人の篤き祈禱

私の入信した明治三十四年は、大學傳道の年である、全國各派の基督教會は國民教化の爲に熱禱を捧げて活動してくれた、私が教會に導かれて聖書を讀む氣に成たのは、其祈禱の結果として、聖靈の導きをうけたのである、仲止した聖書の研究を再び始めたのも、兄弟等の祈禱の力である、個人としては布引山上の祈禱に依て、神學校に導かれて遂に聖職を賜はる身となつた、布哇と米國に招かれて大活動を演じたのも、二十三年間の祈禱の應答

である、私の今日ある所以のものは、私自身の祈禱のみではない、全國諸教會の兄弟姉妹等が禱られたる「義者の篤き祈禱は力あるもの」(雅各五章十六節)である、故に感謝せずには居られない。

三 基督の聖愛の力

私の生涯に回轉の動機を與へたものは、支那に於けるピテキンスの犠牲の死である、其夫人の爲には支那人は夫君の敵である、令息の爲には親父の仇である、然るに其敵を呪詛はず、反て其罪を赦して其仇敵の爲に、愛の奉仕をなさんとする犠牲の精神は、抑も何處より來るか、「主は我等の爲に生を棄て給へり是に由て愛といふ事を知たり我等また兄弟の爲に生を捐べし」(約翰一書三章十六節)とある如く、十字架上に寶血を流して萬民の犠牲となり給ひし、基督の愛の精神から來たものである。

成ほど米國人は排日問題を起して我々日本人を惱ました、之は米國政治家の大失敗であ

る、然し米國基督者の内にはピテキンスの如き、其遺族の如き、(既に遺子なるピテキンスは一昨年支那に來て亡父の記念教會の宣教師として活動して居る)支那人といはず、印度人といはず、日本人といはず、世界人道の爲に「基督の心」を心として、今日尙ほ決死的奉仕をする者、なさんとする者が澤山居るのである、基督教の眞價値は、山と積れた黄卷赤軸の經文ではない、骨董流の哲學でもない、敢々たる燃ゆるが如き犠牲の精神、愛の生命である。

附 記

顧みれば今や日本人の精神界は、愛の大飢饉である、妻は夫を棄て、夫は妻を捨て、親は子を棄て、子は親を捨て、頻々として家出する者の多きは、骨肉間に於ける愛の缺乏ではないか、到處に詐欺、強盜、殺人の續出するは、社會的に愛の飢饉ではないか、長者を殺し、先達を瘞し、申すも恐懼多きことながら、畏くも攝政宮殿下にピストルを打けし

不敬漢の出るが如きは、國家的に天と人とを敬愛する精神の滅却せる、國民道徳の頹廢ではないか、政治家も學者も實業家も見わたす限り現實曝露の悲哀である、斯る現代の危機に際して、聖書を學んで自らを教育し、祈禱を捧げて父神の指導を蒙り、基督の聖愛に浴するにあらずば、我國民の將來は如何になりゆくかを憂ひ悲むものである、幸に私は之に依て根本的精神より、基督の救にあづかり革新して基督者と成たもので、之が私の改心改宗の動機である。

敬愛する讀者諸君、頼朝から銀製の猫を貰つた西行法師を見よ、彼は其猫を門前の子供に與へた時に、貴い銀の猫を棄るなんテ、「西行の狂氣坊主」と嘲笑つた傍觀者に、「西行歌ふて曰く。

世を捨てし身には何をか望むらん

もとむる實はほかにありけり

と、欣然、鎌倉を去つたといふことである、私は西行の如き世棄人ではないが、私の求む

むる靈界の寶は、基督教にあるからである、私の改宗を狂者と罵り、愚者と嗤はん者は、謹んで聖書を読み、(馬太傳十三章四十四節に)。

天國は畑に藏れたる寶の如し、人見いださば之を秘し、喜び歸り、其所有を盡く賣て其畑を買ふなり。

(同四十五六節に)。

また天國は好眞珠を求めんとする商人の如し、一つの値ひ高き眞珠を見出さば、其所有を盡く賣りて之を買ふなり。

と基督の仰せられたる如く、思ひに優る貴重の寶を基督教から發見するであらう、従つてあらずもがなの因襲的思想や、傳統的のものを棄つるに至るであらう、夫は輕卒でもなければ、狂氣の沙汰でもない、當然の結果である、讀者諸君も神を信じ基督を信じて身心の救を蒙り、尙ほ靈的の財寶を聖書のうちから、豊富に獲られんことをお勧めすると共に私は誠意を以て讀者諸君の救の爲に神に禱るものである。

余が改宗の動機終

昭和二年二月十五日印刷納本
昭和二年三月壹日發行

定價金三拾五錢

版權
所有

著者兼
發行者
今井 革

東京市小石川區水道端町二ノ六四

印刷者
鈴木 源 助

東京市日本橋區兜町五番地

印刷所
鈴木 印刷 所

東京市日本橋區兜町五番地

東京市小石川區水道端町二丁目六十四番地

發行所

文教會

總發東京七五八〇七

今井 革著

平等か差別か

定價 五 錢
送料 二 錢

基督教の平等説を誤解せる世人のために最も平易に痛快に説明したものである。

今井 革著

偶像を拜するなかれ

定價 五 錢
送料 二 錢

佛教信者が基督者に成つた時に祖先傳來の佛像を如何に處置すべきかに就て當惑して居る人々の爲めに根本的に解決説明したものである。

以上は傳道用書として求道者諸氏の爲めに必要なるのみならず基督者のためにも必讀の書たるを疑はず。百部以上一割引の事

發行所

東京市小石川區
水道端町二丁目六十四番地

文 教 舎
振替東京七五八〇七番

終

(Printed in Japan)

